

「境界」に生きる「モンゴル世界」——本書の射程と構成
ユ・ヒョジョン —— 003

第1部：見える境界と見えざる境界 —— 025

[第1章] 中国東北三省のモンゴル人世界

ボルジギン・ブレンサイン —— 027

I 中国東北地域の形成 —— 027

II 柳条辺墻と東北地域 —— 033

III 東北三省内モンゴル人社会の歴史的歩み —— 038

1. 黒龍江省のモンゴル人 —— 040

2. 吉林省のモンゴル人 —— 048

3. 遼寧省のモンゴル人 —— 054

IV 「省外四旗」からモンゴル族自治区へ —— 066

1. 満洲国の建国とモンゴル人の「台頭」 —— 069

2. 満洲国期の「属地主義政治」 —— 073

3. 「内モンゴルの統一」と「省外四旗」の運命 —— 076

V モンゴル族になった旗人 —— 083

1. 鳳城・岫岩のモンゴル旗人 —— 091

2. 旗人として生きてきたバルガ・モンゴル人 —— 098

VI 内モンゴルへの眼差し —— 105

[第2章] ダウールはモンゴル族か否か

—— 1950年代中国における「民族識別」と「区域自治」の政治学

ユ・ヒョジョン —— 115

I 国境にまたがる「モンゴル人」の「民族識別」と中国の「民族識別」 —— 115

II ダウール識別への歩み —— 126

1. 「ダウール問題」の発見と発生 —— 126

2. 「内モン古呼納盟民族調査」 —— 133

3. 黒龍江省におけるダウール族「自治区」の設立 —— 138

4. 中央民族学院研究部ダウール調査団 —— 146

III ダウール族の誕生—独自の民族としての認定の論理 —— 151

1. ダウール識別の論理構造—「歴史来源」と「四点識別」 —— 151

(1) 傅楽煥論文「ダウールの民族成分識別問題について」

(2) 「四点識別」

2. 独立言語と方言の間—「スターリン言語学」とダウールの民族識別 —— 161

(1) 「ダウール語はモンゴル語族の中の独立言語である」

(2) 「スターリン言語学」と中国の言語・民族研究

(3) サンジェーエフのモンゴル語比較研究とダウール語の位置

3. 「ダウール人は一つの独自の民族として承認されなければならない」 —— 175

(1) 「自願」の原則と「自願」形成のメカニズム

(2) 「ダウール・モンゴル」否定の論理と調査団のダウール史認識

IV 民族「願望」の現実—「区域自治」への波乱に満ちた道程 —— 192

1. 「自治旗」ではなく「自治州」を —— 192

2. 「整風」に託された「区域自治」への願望 —— 198

3. 「整風」から狂風へ—「右派分子」として失墜するプリン —— 209

4. 「同胞」「兄弟民族」、そして自民族の歩みに吹きすさぶ狂風 —— 216

5. 「境界」に跨る狂風—「プリン反党集団冤案」の風域 —— 228

6. 「狂風」のおさまる先
—内モンゴル自治区における「地方民族主義」反対闘争 —— 238

7. 「自治旗」に戻る道 —— 247

V 民族文字への「見果てぬ夢」、
そして「民族識別」と「区域自治」の政治学のその後 —— 259

第2部：境界、境界越えへのまなざしと思い —— 275

[第3章] 「境界」を行き交う民族の思いと大国の思惑

—— 1920年代前半の「モンゴル世界」とソヴィエト、コミンテルン

青木雅浩 —— 277

I 20世紀初頭の「モンゴル世界」の構造 —— 277

II 「モンゴル世界」における民族運動とモンゴル人民政府の成立 —— 279

Ⅲ ソヴィエト、コミンテルンと外モンゴル	——284
1. 中ソ交渉と外モンゴル	——284
2. 外モンゴルとコミンテルン	——289
Ⅳ 各地のモンゴル人の活動とソヴィエト、コミンテルン	——296
1. ソヴィエト、コミンテルンの外モンゴル進出と ブリヤート・モンゴル人	——296
2. フルンボイル、内モンゴルとソヴィエト、コミンテルン	——307
(1) フルンボイルのグループ	
(2) ジョスト盟グループ	
(3) オルドスのグループ	
3. 新疆におけるモンゴル人民党の活動とソヴィエト、コミンテルン	——316
Ⅴ 「モンゴル世界」の一体性、個別性とソヴィエト、コミンテルン	——321

[第4章] 統一文字への夢

——1950年代中国におけるモンゴル語のキリル文字化運動	
テグス	——327
Ⅰ 国境にまたがる民族のことばと文字	——327
Ⅱ キリル文字化運動の背景	——331
1. モンゴル民族の国家的、言語文字的分断	——331
2. 国境にまたがる民族による統一文字使用の承認 —中国建国初期の民族政策	——332
3. キリル文字導入からみる1950年代初期の中ソ関係	——334
Ⅲ キリル文字化運動の展開	——335
1. キリル文字導入の動き	——335
2. キリル文字化の決定と普及	——337
3. 基礎方言の選択をめぐる	——339
(1) 文章語の確立と基礎方言	
(2) モンゴル語の方言調査と分類	
(3) 西部方言を基礎方言に	
4. 語彙の問題	——345
5. ウランバートル会議	——347
6. モンゴル語族諸族の統一文字づくりの試み	——348

Ⅳ キリル文字化運動の挫折	——350
1. 中国の民族・民族語政策の大転換	——350
2. キリル文字化運動の挫折	——352
3. キリル文字化運動の余波—再提起された語彙の問題	——357
Ⅴ 国境にまたがる民族の統一文字への夢	——358

第3部：特論

[特論1] 内モンゴル文学管窺

——リグデン文学から覗く内モンゴルの文学と生活

佐治俊彦 ——367

Ⅰ 私の内モンゴル文学研究の始まり	——367
Ⅱ 内モンゴルの「少数民族文学」	——370
Ⅲ 内モンゴル文学の中でのリグデンの歩み	——374
Ⅳ 文化大革命と『地球宣言—大捜求』について	——386
付『地球宣言—大捜求』序	——388

[特論2] 日本における「東洋史」の成立とモンゴル

松枝 到 ——393

Ⅰ ヘーゲルのモンゴル	——393
Ⅱ 日本における東洋史の前身	——400
Ⅲ 東洋史のはじまり	——402
Ⅳ 近代のモンゴル史	——407
Ⅴ 東洋史とナショナリズム	——412

感謝のことば ユ・ヒョジョン ——423

索引 ——425